

# 自転車とモダンガール

## ——世紀転換期イギリス少女雑誌に見る自立、競争、消費

牟田有紀子

### はじめに

1890年代後半から20世紀初頭、イギリスは自転車に熱狂していた。1895年から1897年にかけての自転車の生産台数は75万程度で、150万人以上が自転車に乗るようになったと言われている（Rubinstein 51）。自転車は初めこそ中産階級の男性の文化だったが、すぐに女性にも子どもにも広まり、さらに上流階級にも労働者階級にも広まった。移動を馬か徒歩、よほど遠方に出かけるのであれば鉄道に頼っていたヴィクトリア朝の人々のモビリティに大きな変革を起こしたのであった。

特に、「家庭の天使」という概念が物語るように、主な活動領域を家庭内に制限されていた女性は、自転車の登場によって付き添いなしのちょっとした遠出が可能になった。家庭や家の近所を簡単に離れることが可能になったこと、女性が運動をすること、馬ですら横座りで乗っていた時代にサドルを跨いでペダルを漕ぐこと、自転車に関わる全てが女性を取り巻くイデオロギーを巡る議論を巻き起こした。

一方で、「少女」の文化もまた、自転車の登場によって「モダン」なものへと前進した。しかしながら、子どもと自転車の関係、とくに少女と自転車の関係がどのような過程を経て深まったのかは、健康に良いとされたから、行動範囲の拡大に貢献したからという議論で止まってしまう傾向にある。Sally Mitchellは、*The New Girl: Girls' Culture in England, 1880-1915* (1995) で、男性・少年の文化が少女の領域に流入し、ヴィクトリア朝的価値観を攪乱した一例として自転車を挙げている。また Hilary Marlandは、*Health and Girlhood in Britain, 1874-1920* (2013) で、自転車がいかに健康に良いものとして受け入れられたのか、そして少女の「自立」を助けたのかを、少女の身体解放の視点から論じている。先行研究の多くは、少女と自転車の関係を論じるにあたり、少女雑誌を論拠として多く挙げているにもかかわらず、19世紀末に出現した大衆消費社会において、自転車が少女にもたらした意識の変化についての指摘が不十分である。

後期ヴィクトリア朝を代表する少女雑誌*Girl's Own Paper* (1880-1908；以下、*GOP*)<sup>1</sup> や世紀転換期に生まれた商業主義的な少女雑誌*Girl's Realm* (1898-1915；以

下, GR) は, 自転車に関する記事を数多く掲載し, 自転車とはどのような乗り物なのかを研究し, 乗り方や選び方のアドバイスを提供するだけでなく, 自転車もたらす健康の向上はもちろん, 自転車によって得られる「自立」の意識を説いた。GR は自転車に乗る少女の能力の高さと競争心, そして少女の消費欲求を示した点において興味深い。本稿では, 上記2誌を中心に, 大人が提示した自転車の価値と, 読者の目を通したときの自転車の価値の二つの側面から世紀転換期イギリスにおける自転車の価値を問い直す。そして自転車のイメージとその利用を通して, 「少女」という存在を巡る言説の変化の一端を明らかにする。

## 1. 「少女」とは何者か ― 定義とその流動性

本節では, 「少女」という存在の不安定性と流動性を, 子どもと少女の文化の発達とともに確認する。便宜上「少女」と表記せざるを得ないが, 少女と子どもはある程度区別されなければならない。19世紀末イギリスの少女文化を論じる場合, “girl” はもちろん小さな子どもを含む可能性はあるものの, 10代から未婚の20代半ばくらいまでの女性を指しており, さらに “a state of mind rather than a chronological or legal concept” (Mitchell 7) と考えたほうが良い。このような不安定な概念として提示せざるを得ないのは, 次のような政治的, 文化的な背景があることに依拠する。

15世紀, 16世紀に認められるような, 子どもは「不完全な大人」であり, 立派な大人にするために厳しい教育を施さなければならないという子ども観は, John LockeやJean-Jacques Rousseauにより徐々に書き換えられた。この頃の子どもの読み物は教訓的なものばかりで, 子どもの楽しみを考えたものではなかった。18世紀末から19世紀初頭にかけて, ロマン派の文人たちは子どもを無垢の象徴, 完全なる存在として捉え, 「不完全な大人」という子ども観を覆した。19世紀に入ると, 性別に関わらず全ての「子ども」に向けた読み物が出版されるようになった。とはいえ, まだ教訓性の高い読み物が多かったことは言うまでもない。

19世紀以降, 工場法の見直しによって児童労働の時間の短縮と年齢制限が実現し, また1870年に始まる初等教育法の相次ぐ改正によって, 20世紀に入る頃には8歳までの子どもの就学率は9割に達した。その結果子どもの社会的地位が見直されるようになった (Wright 24)。これは本稿がターゲットとしている中産階級の少女に限定されることではあるが, 初等教育を終えてから結婚するまでの時間を過ごすために推奨されたのが, 家庭内であれ学校であれ, 教育を継続することである。1869年にはケンブリッジ大学に女子専用のガートン・コレッジが設置され, 1880年になるとロンドン大学が女性に大学の学位の取得を認めた。教養高い妻・母になるための教育ではなく, 学問を修めるための女子教育が徐々に勢いを増したのである。さらに1885

年に女性の結婚同意年齢が16歳に引き上げられたことも、子どもと大人の線引きにおいて重要だった。実際に結婚するためには21歳までは父親の同意が必要だったこともあり、19世紀末には、女性が親元に留まる時間、つまり少女でいられる時間が法的に延長されたのである。Mitchellによると、エドワード朝時代を迎えるまでには、初婚平均年齢は約25歳に上がり、少女としていられる時間はますます長くなった(8)。子どもの社会的地位が見直されると同時に、法律や教育が年齢でもって「子ども」を定義することで、子どもと大人の境目に当たる「少女」という時代が現れたのである。

Mitchellは、教育の継続や運動の推奨、少年の文化の流入を経験した少女を“The new girl – no longer a child, not yet a (sexual) adult – occupied a provisional free space. Girl’s culture suggested new way of being, new modes of behavior, and new attitudes that were not yet acceptable for adult women (except in the case of the advanced few)”(3)と定義している。少女には少女の文化が必要となり、また少女は小説や雑誌のような読み物を通して視野を広げ、母親世代が持たなかったような文化を作り上げた。特に1880年代に入ると、「少女」を巡る言説が、大人の女性とも子どもとも切り離されて形成されるようになったが、「少女」とは何者か、どのように教育して大人の女性へと導くべきかという議論は19世紀半ばから始まっていた。例を挙げると、19世紀中期を代表する少女小説作家Charlotte Mary Yongeは、1851年から“young girls, or maidens, or young ladies”(Yonge, “Introductory Letter” i)に向けた雑誌*Monthly Packet of Evening Readings for Younger Members of the English Church*<sup>2</sup>の出版を開始し、英国国教会の中産階級の少女の倫理教育に努めた。またYongeの代表作である*The Daisy Chain; Or, Aspirations: A Family Chronicle*(1856)は、母親を亡くした家庭の少女が、もはや兄弟と同じ勉強や遊びを楽しむ「子ども」ではいられない葛藤を描いている。19世紀中期においては“girls”と“ladies”はほとんど境界線のない存在だったのである。

「少女」という存在そのものが新しい概念だったため、批判の対象にもなった。最も有名なものは、Eliza Lynn Lintonのエッセイだろう。

The Girl of the Period is a creature who dyes her hair and paints her face, as the first articles of her personal religion – a creature whose sole idea of life is fun; whose sole aim is unbounded luxury; and whose dress is the chief object of such thought and intellect as she possesses. Her main endeavour is to outvie her neighbours in the extravagance of fashion. No matter if, in the time of crinolines, she sacrifices decency; in the time of trains, cleanliness; in the time of tied-back skirts, modesty; no matter either, if she makes herself a nuisance

and an inconvenience to every one she meets; – the Girl of the Period has done away with such moral muffishness as consideration for others, or regard for counsel and rebuke. It was all very well in old-fashioned times, when fathers and mothers had some authority and were treated with respect, to be tutored and made to obey, but she is far too fast and flourishing to be stopped in mid-career by these slow old morals; and as she lives to please herself, she does not care if she displeases every one else. (2-3)

Lintonは“The Girl of the Period”というフレーズを使って、両親の言うことを聞くよりも、流行を追って自分の楽しみを見出すことに重きを置く少女を痛烈に批判した。このフレーズは、Lintonが意図した以上の意味で各種雑誌や新聞で悪用され、新しい文化を享受する世代を批判するときの決まり文句として使用された (Onslow 100)。しかしこのエッセイが世に出たことで、それまで得体の知れない存在だった、流行を追って楽しみを見出そうとする少女が“The Girl of the Period”という言葉で戯画化され、風刺と創作の対象となった。つまり、名前をつけることで、実在することが証明されたのだ。この“The Girl of the Period”がどのように扱われるかに、その時代の「少女」という存在を巡る言説が現れる。

Kristine Moruziによると、1869年には雑誌*Girl of the Period Miscellany*が発売され、早くも“The Girl of the Period”と呼ばれる少女たちを肯定的に捉えた。

As a consequence, the *Miscellany* highlights the ambiguous definitions of girlhood in the late 1860s and early 1870s, where the “girl of the period” became a label for any girl (or woman) who sought active participation in the public sphere and who demanded opportunities for better education, rights, and legal protection. (Moruzi 53)

ここから、少女とは「積極的に社会に関与し、教育、権利、法による保護を求める」存在であるという言説が有力になっていった。

19世紀末になると、「少女」のための文化の形成が加速した。特に、福音主義団体であるReligious Tract Societyが、“penny dreadful”と呼ばれる、暴力的で残忍なフィクションを載せていた雑誌から子どもたちを守るために出版した少年雑誌*Boy's Own Paper* (1879-1967; 以下, *BOP*) と*GOP*の登場は、読み物におけるジェンダー区分が明確になったこと、またジェンダーアイデンティティと集団アイデンティティを読み物でもって強化することが、商業的に成功する秘訣なのだとすることを証明した。Mitchellによると、1880年以降、指南書や啓発本のタイトルにおける“young

lady”や“young women”という言葉は“girl”という言葉に置き換えられるようになり，“girl”がタイトルに含まれる小説は何百冊も出版された(6)。雑誌においても、フェミニストであり、New Womanを主人公に据えた小説を数多く執筆したL. T. Meadeが編集長を務めていた*Atalanta* (1887-1898)や、労働者階級向けのゴシップや過剰にロマンティックなシンデレラストーリーを掲載した*Princess's Novelettes* (1886-1904)、そして脱ヴィクトリア朝的な価値観の到来を感じさせるGRなど、読者の階級や教養、ニーズに合わせた雑誌が出版されることによって、政治的、文化的な産物である「少女」という存在の輪郭が明確になっていった。

これらの傾向を考慮すると、世紀末に向かう時代の「少女」を巡る議論には、Michel Foucaultが言うところの言説形成の流動性を見出すことができる。

言説も、沈黙と同様に、決定的に権力に従属させられたものでも、決して対抗させられたものでもない。錯綜し不安定な一つの働き＝ゲームを認めなければならぬのであって、そこでは、言説は、同時に権力の道具にして作用＝結果であるが、しかしまた、障害、支える台、抵抗の点、正反対の戦略のための出発点でもあるのだ。言説は権力を運び、産出する。言説は権力を強化するが、しかしまたそれを内側から蝕み、危険にさらし、脆弱化し、その行手を妨げることを可能にする。(Foucault 130)

武田美保子はこの一節をNew Womanという言説の形成過程を論じるにあたって引用しているが、「少女」を巡る言説においても同様のことが言える。「支配的言説は『権力の手先』にも『効果』にもなりうるし、それが封じようと企てているまさにまったく正反対の言説の可能性を生み出してしまうことにもなる。それゆえ、支配的な言説の出現は、時にそれ以外の、それまで抑圧されてきた声を表明することを可能にする場合もありうる。」(武田 27)。つまり、Lintonが言うところの“The Girl of the Period”が1860年代から70年代にかけての「少女」の支配的言説であったとするならば、そのフレーズが出現したことによって、抑圧されてきた自我を持つ少女の姿が浮かび上がり、1880年代以降には少女文化を牽引するアイコン的存在として見なされるようになった。「少女」とは、決して大人から一方的に強要された理想像ではなく、「複雑で不安定な過程」を経て極めて恣意的に形成される政治的、文化的存在だと定義することができるのである。



## 2. *Girl's Own Paper*における自転車のインパクト — 健康と自立

本節では、New Womanの文脈における自転車の利用を念頭に置きながら、*GOP*における自転車のイメージの変遷を概観し、自転車が少女文化に与えたインパクトを考察する。

前節で引用した「複雑で不安定な過程」を垣間見ることができるのは、雑誌においてであると言えるだろう。Kirsten Drotnerは、後期ヴィクトリア朝における少女雑誌の出現について、“In the history of juvenile magazines, the invention of the girls' periodical is clearly the most important innovation of the late-Victorian era” (123) と述べている。少女雑誌の誕生により、少女は自分たちだけの文化形成の場を持つことが可能になった。性別と年齢で二重に周縁化された存在である「少女」は、長きに亘り大人が与えたいと望むものを甘んじて受け入れなければならなかった。特に読み物の場合、雑誌であれば中産階級の少女がお小遣いで買える程度に安価だったため、少女が自ら読み物の取捨選択を行うことができるようになった。もちろんお小遣いは親からもらうため、完全に親の監視を逃れることはできないが、雑誌に掲載されている様々なジャンルの読み物の中から、自分が読みたい記事を選ぶ自由は残されていただろう。

*GOP*は、非常に肯定的な文脈で「少女」とは何者であるかという議論を行った先駆的な雑誌だった。*GOP*は福音主義的精神に基づいた良妻賢母教育を理想としながらも、“penny dreadful”のような悪質な読み物を市場から排除し、幅広い読者を獲得するために、可能な限り宗教色を薄め、読み物をより「楽しい」ものにするために試行錯誤を繰り返した。その結果、保守路線を取りつつも、読者の要望や流行を紙面に反映させるバランス感覚に優れた雑誌となった。*GOP*は1部1ペニー、16ページ構成の週刊誌で、海外にも輸出された。読者投稿欄から、欧米や植民地のみならず、日本や中国にも購読者がいたことがわかる。*GOP*は1880年代半ばに売り上げ全盛期を迎え、推定販売部数は150,000から250,000に増えた (Moruzi, “Children's Periodicals” 294)。恋愛小説、冒険小説、詩、歴史や地理に関するエッセイ、女子教育、女性の職業、社交界のマナー、家計の節約術、クイズ、各種コンペティション、読者投稿欄など、わずか16ページの中にあらゆるジャンルの読み物を掲載し、幅広い階級と年齢層をターゲットにすることによって、“the first broadly successful magazine for girls” (Mitchell 27) となった。

自転車は男性の領域から流入した新しい文化であるにもかかわらず、*GOP*的な「少女」らしさの中でも肯定的に解釈しうる稀有な存在だった。少女には「少女」のための物、つまり読み物、服、教育、仕事、マナー、さらにメンタリティまでもが恣意的

に創られてきたなか、自転車は男女も大人も子どもも関係なく流行した前代未聞の物だったかもしれない。

Tom Ambroseによると、「18世紀末、ライフスタイルを劇的に変えるふたつの発明が生まれた。ひとつは蒸気機関車で・・・もうひとつは世界初の実用的な自転車である。自転車は個人旅行に革命をもたらし、馬に頼る近・中距離移動は終わりを告げた。」(6) 1880年代にはゴムタイヤが発明され、1890年代になるとSwiftと呼ばれる安全型自転車が大量生産された (Ambrose 62)。イギリスで自転車が流行した1890年代半ばごろには、安全型自転車の価格は15ポンド程度だった。事務職やジャーナリストをしている下層中産階級の男性の年収が150～300ポンド、労働者階級になると女性の熟練労働者や店員の年収が50～75ポンド、補助店員、家事使用人、お針子などになると年収は12～20ポンドだった (川端 105) という実情から見ても、多くの人々にとって、自転車は高級品だった。しかし1905年には中古車を1ポンド程度で買うことができたため、自転車を所有する人口は増加し続けた (Mitchell 110)。

自転車をもたらしたモビリティの自由を最初に謳歌したのはNew Womanだった。女性に移動の自由と身体の解放を与えた自転車は、旧来的な女性らしさを飛び越えるNew Womanの相棒となった。Chris Willisは、自転車とNew Womanについて次のように述べている。“Popular fiction of the time often uses the figure of the female cyclist as a paradigm of the New Woman. If a character makes her first appearance on a bicycle, it is almost inevitable that she will turn out to be single and well-educated, with strong views on women’s rights.” (53) 自転車に乗る女性というのは、「独身で、良い教育を受けていて、女性の権利にはっきりとした意見を持っている」ということと同意義であった。自転車の持つ“gendered social and literary meanings” (Wintle 69) を内在化させた存在は、良くも悪くも注目を集めたため、批判されることも少なくなかった。故に、結婚して家庭を持つ「普通の」大人の女性になりたければ、モビリティの自由は諦めるべきだという解釈もあった。Wintleが指摘するように、Frances Willardが*A Wheel within a Wheel* (1895) の冒頭を、少女時代の終焉と自由の喪失から始めていることがその一例である (71)。

I “ran wild” until my 16th birthday when the hampering long skirts were brought, with their accompanying corset and high heels; my hair was clubbed up with pins, and I remember writing in my journal, in the first heartbreak of a young human colt taken from its pleasant pasture, “altogether I recognize that my occupation is gone.” (Willard 10)

少女時代の終焉は身体的にも精神的にも自由な時間の終わりを意味する。自転車や後

年に登場する自動車のインパクトは強烈だったが、多くの女性にとって、現実には Willard の一節のほうが近かったかもしれない。しかしそれは裏を返せば、自転車や服装に現れる自由は、まだ大人になりきっていない少女の特権なのだということも意味している。このような自転車と New Woman のパラダイムは「少女」を巡る言説形成の中でどのように解体・再構築されたのだろうか。その経緯を GOP で確認したい。

少女が自転車に乗るときに特に懸念されたのが、性の早熟である。例えば、性科学の先駆者である Robert L. Dickinson は、自転車は足の運動を促すことにより、血の巡りと骨盤周りの問題を改善する特別な効果があるとしつつも、“It is suggested that the friction of the saddle may lead to sexual excitement; and, although the author is only aware of one instance, still he thinks that a proper arrangement of the saddle should be provided to prevent any possibility of contact with the clitoris” (280) と、自転車によって性に目覚める危険性を示唆している。GOP における自転車の議論は、この不安の払拭から始まった。

GOP の健康・美容に関する記事は、Medicus というペンネームを用いた William Gordon Stables 医師が担当していた。彼は BOP の健康・医療のアドバイザーも務めており、冒険小説作家としても活躍した (Forrester 18-21)。Stables は過度なダイエットや化粧、コルセットの使用などを否定し、適度に運動して食欲や精神を健全に保つことの重要性を一貫して主張した。また少女が自転車に乗ることを強く推奨した人物でもあった (Marland 110)。GOP は性に関する話題を徹底的に排除することによって、「少女のための」健康・美容論を展開することを可能にした。当然この非常に恣意的な性の排除は、Marland が “Cycling for women thus became an opportunity for doctors to lead a movement away from the obsession with female frailty, nervous complaints and hysteria to manage a new process of achieving health” (114) と指摘するように、大人の男性による「少女」を巡る言説の支配ともとれるわけだが、ここでは性という制約のなかで達成できた健康観の成立について考察したい。

GOP で自転車を巡る議論が活発になったのは、1895年のことである。1895年10月5日の “The Dress for Bicycle” という記事では、自転車に乗ること自体に対する不安が書かれることはなく、“the bicycle seems to have come as a great



図1 自転車用合理服 (p. 13)



emancipation to women” (Blaquière 12) として好意的に受け入れられている。この記事ではフランスやアメリカで図1のような自転車用の合理服（脚衣型のスーツ）が流行していることを批判し、スカートの着用を支持している。山村明子によると、「ペダルをこぐ動作は本質的には優雅な営みではないものの、楽しみでもあり、身体には良い影響を与えることを認めている。その上で、優雅に見えない体勢にはならないように、バタバタとした動きを見せない」(122) ためにスカートの着用が推奨された。自転車に関する議論が始まった当初、あくまで自転車は「女性らしさ」の範疇の中で健康のために乗るものであり、競争やスピードを楽しむために乗るものではなかったのだ。“Girls’ Attire: The Newest and Best” という記事では、きつく縛った従来のコルセットのまま自転車に乗ったり運動をしたりするのは危険であるため、最新型コルセットを新調することを推奨している (344)。StablesはGOPでコルセットへの反対を一貫して主張し続けたが、この時代の読者がいきなりコルセットを着けなくなるというのは考えにくい。そのため、自転車の運転という、それまでになかった姿勢で行う運動が取り入れられたことによって、緩やかなコルセットの着用がより実証的に推進され得たのであった。自転車は、19世紀的な女性の身体観から少女を解放する契機となった。

A. T. Schofield医師が寄稿した“The Cycling Craze”は、屋外に出る時間が少ない都会生活における自転車の重要性を説きながら、Dickinsonのような見解を批判している。

Bicycling, of course, is pretty nearly the opposite to this[walking]; but we have lived long enough to see that the first storm of disapproval which it very naturally met with, has not really been borne out by facts. The position, of course, on a bicycle is entirely different from that assumed in any other exercise, and is one that has been very generally condemned by medical men . . . . One main evil of the position is the form of seat used. What we should like to see on ladies’ cycles is a nice padded cushion, flat in front, and perhaps rounded behind, instead of the hard leather saddle that is very much like the section of a long-necked pear. (185)

“medical men” というのは、明らかにDickinsonのような人物を指している。自転車に対する批判の嵐は事実によって証明されたものではないとしつつも、サドルによる悪影響は完全には否定していないあたり、自転車のもたらす影響がはっきりとわかっていなかった時代の記事だという印象が強い。しかし、むやみに否定的な噂を信じずに、運動によって健康増進を図るべきだという現代的な身体観を見出すことはでき

る。自転車の登場によって、Stablesが提唱してきた心身の健康が実践されるようになり、読者により現代的な健康観を提示できるようになったのである。

健康に関する議論の次に起こるのが、少女と技術の出会いだった。GOPは上記のような自転車の健康への良い影響や優雅に自転車に乗る方法を巡る議論が一段落したら、より自転車をミクロな視点で捉え、少女と技術の出会いの場を作り始めた。

1897年3月6日に掲載された記事“The Cycle: How to Keep and Clean It”は、図2のような自転車の説明図を載せており、各部品がどのように作用しながら自転車が動いているのかを詳しく説明している。埃を払ったりオイルを差したりするのは「女性らしい」作業だとは思えないが、“Those of us who are the happy possessors of cycles should so understand and appreciate the adjustment and mechanism as to be able to keep them in perfect order” (362) として、自転車を持つ者の管理責任を読者に説明している。もちろんここでも、サドルの問題への言及があるのだが、この記事の著者は、“There are many complaints as to saddles, but there are generally caused through wrong adjustment, and the saddle, unless the brake springs are broken and cause the trouble, can generally be made comfortable if properly titled to suit the posture of the rider” (364) と、サドルの問題は持ち主の管理が行き届いていれば緩和できるものだとしている。つまり少女が技術を身に着けられれば、大人の男性医師たちの意見に対抗し得るということである。

1897年10月23日の記事“Bicycling to Health and Fortune”もまた、自転車選びの注意点に関するものである。興味深い点は、自転車は“your alter ego” (Liston 52; 強調原文) なのだから慎重に選ぶべきだと言うところにある。また自転車は“alter ego”なのだから、“Look well after your machine; attend to its wants and it will serve you faithfully, and by its beautiful smooth running will give you health and strength instead of incessantly annoying and irritating you” (Liston 53) と述べている。自転車を丁寧に扱い、管理を怠らないことは、自転車のためでもあり、また自分のためでもあるのだ。GOPは自転車の管理を自己研鑽と置き換えることによって、読者の責任感と我慢強さを養おうとしているのだろう。

この風潮は20世紀に入るとより明確になる。同じくLawrence Listonによる1901年1月26日の記事“Bicycle Worries and How to Cope with Them-Part I”にも、自

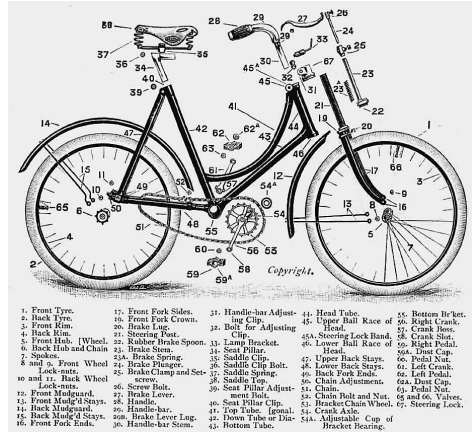


図2 自転車の説明図 (p. 363)

転車が壊れたときの対処法が書かれている。少女文化における自転車と少女の関係性の変容を語る上で重要な言葉“independent”がそこに出現する。

The girl who rides a bicycle should try to learn something of the temperament and little failings of her steed and to know what to do when it falls ill; no rider can be really independent who trust to the chance of having some companion who can set things right for her, or who has to wait until she can find some repairer's workshop. (259)

自転車は確かに付き添いなしで女性が出かける良い口実となったが、*GOP*は自転車が故障したときに、誰かに頼るのではなく、自分で修理してこそ“independent”なのだと読者に説く。これには続きがあり、Part2では雑音やブレーキの修理の仕方を説明しつつ、読者が自転車と付き合うことで観察眼や我慢強さを養うことを期待している。

... the detection and treatment of them will teach any girl many an important lesson in observation and patience. Never go about the matter in a hurry, always be deliberate, and let everything you do have a reason for its being done. In dealing with sick machinery, as with ailing people, much more can often be done by gentle and patient persistence than by bustle and force. (390)

当時女性の欠点とされた短気、感情的性格、無力さを、自転車を管理する技術を身に着けることによって克服させようという試みがこの文面から読み取れる。少女と技術に親和性があることが判明したのは、自転車の出現によるところが大きいのではないだろうか。服装やサドルから始まった自転車を巡る議論は、数年のうちにある意味では長い間「女性らしい」とされてきた欠点を克服する議論へ、さらに少女と技術の親和性を認める議論へと発展したのである。

自転車大流行の末期である1903年6月6日には、“The Newest Bicycles”という記事が掲載された。その記事は、ブレーキやバネが改良された最新型の自転車を紹介しているのだが、同時に自転車を巡る初期の議論との決別を示唆している。

The thought of the spinning-wheel of old times, when maidens were content with the romance of housewifery bliss, lends itself to a new inspiration which is now outside the garden gate. The girl of the period now regards the wheel of the house as an old love, which takes its stand in artistic furniture as a relic

of the past, while she gives longing glances towards the wheel of the road, which has already given her so much joy and health- giving recreation. (Bacon 565)

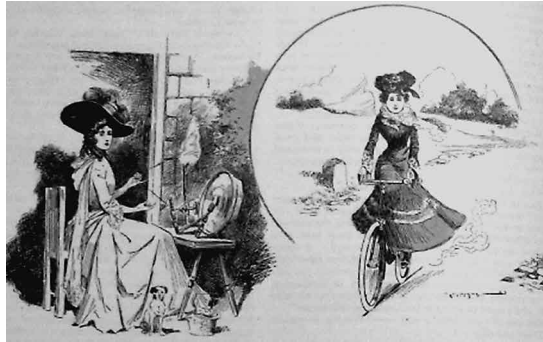


図3 少女と“wheel” (p. 566)

筆者によると、図3が表すように、“the wheel of the house”つまり糸車

は昔のものであり、「モダン」な少女は“the wheel of the road”つまり自転車を好む。自転車を自由に乗りこなす20世紀の少女と、家庭内に留まる少女が、全く異なる存在であることを、先述した“The Girl of the Period”というフレーズを使って表している。社会規範に従わない少女を批判する言葉だった“The Girl of the Period”は、最新の流行を取り入れ、家庭の外に飛び出し、新しい技術を使いこなすことに喜びを見出す少女を肯定的に表現する言葉となったことがわかる。それでいて、GOPにおける自転車のイメージには、New Womanと自転車の関係のように社会規範を破壊するような示唆はない。GOPは、“The Girl of the Period”やNew Womanを巡る議論を引き継ぎつつ、自転車を否定させない文脈を作り出したと言えるだろう。

自転車の出現により、少女の身体や健康を巡る議論は明らかに活発になった。コルセットやサドルの在り方はなかなか決着のつかない議論だったが、20世紀に近づくにつれ、Dickinsonが懸念していたような不安は薄くなり、健康への良い影響のほうが大きく取り上げられるようになった。しかしそれだけではなく、自転車は少女の自立をも促した。付き添い人がいないという状況だけを「自立」と見なすのではなく、自転車が故障したときに自分で治せる知識と我慢強さがあることを「自立」と言うのだと主張することで、少女文化における自立の定義を書き換えた。家に籠って「女性らしい」ことをしている少女はついに昔の存在と化してしまい、自由と健康と自立を謳歌する少女が現れた。自転車のイメージを追うことによって、「少女」を巡る言説が常に流動的であり、「少女」が社会の変化と連動した存在であることがわかる。

### 3. *Girl's Realm* による自転車の利用

#### — 競争と消費

自転車が「少女」とは何者か、どのような存在であるべきかという議論に与えた影響は、自由や健康、自立に関することだけではない。自転車には、少女の競争心と消費欲求を誘発したという「功罪」がある。GOPは、ヴィクトリア朝的価値観の中で、

自転車が健康に良く、少女の自立を助けるという議論を行った。自由、健康、自立の定義を書き換えようとしたGOPの試みには十分価値があるのだが、より「モダン」な少女を描こうとしたGRは、自転車を用いて、そのタイトル通り「少女の領域」をさらに広げようと試みている。GOPが、少女が自己犠牲の精神、両親への絶対服従、キリスト教的倫理観を体現すべき存在だったころの少女観からの脱却を示す雑誌であるとすれば、GRはさらにそこから一歩「モダン」な価値観を提示するような雑誌であると考えられよう。GRとGOPの違いとして、ヴィクトリア朝的価値観をどれだけ受け継いでいるかという点が挙げられるが、MoruziはGRに描かれているのは“The Modern Girl” (163) であるとして、GRの「モダン」な面を次のように定義している。

Unlike the other girls' periodicals I have discussed, the Girl's Realm is significantly less constrained by nineteenth-century ideas of femininity. Instead, the magazine uses current events to fashion girlhood as a time of bravery and courage. The girls in its pages are educated and feminine, yet the Girl's Realm focuses on girl heroes. Involved in adventures both at home and abroad, girls are capable and confident when they need to be. Along side adventure stories set in the Colonies are equally thrilling stories of bravery closer to home, and non-fiction articles encourage girls to seek opportunities beyond the domestic sphere. (Moruzi 163)

つまり、「モダンガール」とは、19世紀的女性観に縛られておらず、勇敢で、自信をもって色々なことができ、家庭の外でも能力を発揮する機会を求めるような少女である。

GRは作家Alice Corkranが編集長を務める一部6ペンスの月刊誌で、大人の女性用の雑誌*Lady's Realm* (1896-1914 ? ; 以下、LR) の中に設けられた子ども用コーナーから派生した雑誌である。メインターゲットをNew Womanに据えたLRの精神を引き継いだGRは、そもそも女子教育や運動などの是非を議論するようなことはなく、当然のものとして受け入れている。根底にはキリスト教的精神が流れているものの、その性格は極めて商業主義的で、読者の倫理教育よりも、売り上げの増加を常に狙っているような雑誌として位置づけられる。読者投稿欄で確認できる最年少読者は6歳で、初期には10歳から14歳程度の読者が多かったが、出版から数年後には20代半ばまでターゲットとしていた。本節ではGRを中心に、自転車を大衆消費文化の到来のアイコンと見なし、少女が競争心と消費欲求を持つ存在であるということがいかにして明らかにされたかを考察する。

Marlandは、サイクリングは疲れすぎなければ、もしくは「競争しなければ」、女



性にとって良い運動であると思なされたと指摘しているが (111), GRはこの規範を乗り越えようと試みている。GRでは“The Girl of the Period”というフレーズが、編集者が読者に向けた励ましや応援のメッセージを掲載する編集後記欄のタイトル“Chat with the Girl of the Period”に使われていることも象徴的である。GRにおいては、読者は全員“The Girl of the Period”であり、肯定的な文脈において、その「異端」が称賛されるべき存在なのだ。とはいえ、根強く残る規範に対して、突然真っ向から挑むような記事が現れるわけではない。自転車という「モダン」な時代の到来を告げる装置を使って、少女にどのようなことができるか試行錯誤している。それが競争と消費の意識の創出である。

1900年8月号から掲載された“The Puncture”という小説では、自転車が恋愛のすれ違いを一時忘れるための気晴らしの道具として使われている。気が強くてプライドが高い主人公の少女Deborahは、自分が好意を寄せていた青年に対して素直になれなかったせいで嫌われてしまったかもしれないと思いながら、8月の暑い日に10マイルも自転車を走らせる。当然疲れ果てて、木陰で一休みして、帰ろうと思ったところでタイヤがパンクしていることがわかり、家に帰れないと嘆く。夜になっても立ち往生していると、偶然その意中の青年が通りかかり、自転車を修理してくれて仲直りするという物語である。自転車に乗り降りする姿を“she jumped off her bicycle with the careless grace of youth” (982) と描写する配慮はあるものの、“To-day she had kept self-reproach at bay by rapid movement, for, in spite of heat, she had ridden faster as usual” (982) とあるように、暑いなか自転車で颯爽と駆け抜ける様子は、サドルが性の早熟をもたらすと懸念していた時代にはなかった描写だろう。10マイル、つまり約16キロの距離を走る少女が、身体に良いという理由からではなく、異性への欲求を解消するために自転車を利用しているのは興味深い。しかしGOPでは“no rider can be really independent who trust to the chance of having some companion who can set things right for her, or who has to wait until she can find some repairer’s workshop” と言われていたにも拘わらず、男性に救われるような内容になってしまうのは、少女向け小説がどうしても保守寄りになる傾向をもっているためであると考えられよう。いずれにしても、この時点ではどこまで「モダン」な少女を描けるかという実験段階にあったのだと考えられる。1902年5月号の“How to Keep My Machine Nice”という記事は、ユーモラスな挿絵と共に、自転車の手入れの仕方を説明している。手や服が汚れることを恐れることなく手入れせよという態度なのだが、記事の内容と挿絵のストーリーが異なっている。という



図4 修理は少年が (p. 578)

のも、挿絵では自分で手入れしようとした結果、自転車をバラバラにしてしまって、少年に修理を頼むという内容になっているのだ。図4のように、自分で手入れができない少女がコメディタッチで描かれているものの、自転車の管理に対するアンビバレントな態度が見られる。

一方で同時期には、少女が少年よりも優れていることを証明するために自転車が使われることもあった。まずは“*What Girls Are Doing*”というシリーズものの記事について見てみたい。この企画は、人命救助した少女や莫大な財産の相続人とな

った少女、高等教育機関で優等な成績を取った少女の名誉を紹介するというものなのだが、1901年11月号には電報配達の少女が、少年よりも優れていることを讃える記事が図5のように写真付きで掲載されている。“*The gratifying part of the scheme lies in the fact . . . that these girls do their work much better than boys, and do not waste time by dawdling. This is proved by the result that though the girls are paid at the same rate as boys, they get through more messages and actually earn more wages.*” (77) 記事によるとこの少女は労働者階級であって、読者と同じ階級の少女ではないものの、少女が少年よりも優れていることを称賛して、しかもそれを「男の子っばい」とか「やんちゃ」と非難しないところなど、時代の変化を感じ取ることができる。Marlandが指摘するように、自転車に乗るには、競争心を持たないことが暗黙の了解だったが、自転車は少年と少女が同じ土俵に立ってスピードなり身体能力なりを発揮できる数少ない機会となり、少女の能力が少年に劣らないことを読者に伝える装置となったのである。

少女の能力と努力を描く小説にも言及しよう。1902年の11月号から連載が始まった“*Little Mother Meg*”は、当時人気児童文学作家だったEthel Turnerの代表作*Seven Little Australians* (1894)の第4作目の作品で、第1作目に登場した16歳のMeg Woolcotが大人になり、家庭を持つ物語である。1902年12月号に掲載された第5章から第7章では、Woolcot家7人兄弟のうち5番目のBuntyと6番目のPoppetが自転車を買に行く。最初はBuntyだけが自転車を買うために9ポンドのお小遣いをもらい、Poppetはそれに同行するだけ、という話だったのだが、Poppetがあまりにうっとりとして自転車を眺めているため、Buntyは9ポンドの自転車を諦め、自分に7ポンドの自転車を、Poppetに4ポンドの自転車を買うことに決める。足りない2ポンドは日々のお小遣いから少しずつ自転車屋に返済することになってしまったが、Poppetは大喜びして、二人で自転車に乗って帰宅する。ここでは、自転車は少年が乗るもの

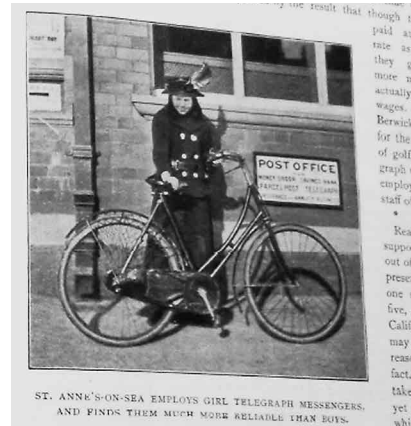


図5 電報配達の少女 (p. 77)

だと親世代は思っていて、Buntyにだけお小遣いを渡しているが、Buntyが自転車に乗るのに性別も年齢も関係ないことを理解し、価格に差はあれ自転車屋に借金をしてまで妹と自転車を所有し、“But the bicycles were their own, and they had brought them home themselves!” (114) という経験を共有していることは重要である。

そのうえ、まだ子どものPoppetがなぜ自転車に乗れるかという、それは彼女が誰にも見られないところで努力をしていたからである。

“I fell off a lot of times first,” she said, “and I got a lot of bruises, but the third day I went

twice round the grass near the stables. I’d have gone three times only I kept looking up at the house to see if Pip was home, and it made me tip over.” (112) Poppetは、実は兄Pipの自転車でこっそり練習をしており、何度も転んで怪我をして自転車の乗り方を習得したのだった。結果として図6のように、兄よりも妹のほうが上手に自転車を乗りこなすことを印象付ける挿絵が書かれた。とにかく身体に負担のないように走ることや、足首を見せるのははしたないという理由で合理服が否定されていた文脈で考えると、少女が何度も転んで怪我をして、努力の末に兄よりも上手に自転車に乗れるようになったという描写が見られることは、少女は少年よりも身体的に劣っているという身体観への挑戦とも取れる。「男勝り」な少女が寿がれるようになったのもまた、「少女」を巡る言説が変容していることを意味するのである。

最後に、消費欲求の対象としての自転車の功罪を明らかにしたい。20世紀に入るところには、中古自転車は1ポンド程度で買えたようだが、BuntyとPoppetが自分のお小遣いでは買えなかったように、多くの少女にとって、最新型の自転車は簡単には手に入らなかった。そのため、自転車は雑誌で開催されていた各種コンペティションの賞品として、十分な役割を果たした。つまり、少女の競争心と消費欲求を曝け出すという役割である。

GRが出版された19世紀末から20世紀初めは、Jean Baudrillardの論じている消費社会が成立した時期だと言えるだろう。モノの消費が使用価値のみを求めて行われるのではなく、モノの所有を通して示されるモノの付加価値を求めて行われるようになった社会において、子どもは一人前の消費者として大人と同様の位置を獲得することになる(永井 7)。一方では、この時代における中産階級の少女を含めた子どもの消費活動を明らかにするのは非常に困難である。というのも、Daniel Thomas Cook



図6 転ぶBunty (p. 115)

が指摘しているように、“Hence, children’s consumption always implicates and is implicated in the practices, beliefs, and contexts of adults, especially parents, and most often mothers” (587) であるがゆえに、“This fundamental structure of children’s economic dependency complicates simple, typical presumptions about the autonomy and individuality of social actors” (578) という結果を招いてしまうからだ。各種少女雑誌の状況を俯瞰してみても、実際には読者が自分のお小遣いで買っていたのか、親が子どもへの投資として買い与えていたのかを判別することは不可能である。しかし次のようなコンペティションにおいては、そこに参加するという消費の恩恵を享受し、面倒な課題をこなし、他の読者と競争して自転車ないし他の賞品を手に入れようとしたのは、ほぼ間違いなく親ではなく読者自身だろう。雑誌には、競争心と所有への欲求を抱えた少女の姿が映し出されているのである。

GRは毎月何らかのコンペティションを開催した。クイズだったり、エッセイだったり、色々なテーマが課題になるのだが、そこに対する態度にも、「少女」という存在をどのように捉えるかという各雑誌の理念の違いが現れる。GOPのコンペティションには、集まった絵を病院や施設に贈るといったような慈善活動的な意味合いが含まれることが多々あり、一方GRではコンペティションはあからさまに販売部数を伸ばすために使われた。その最初のコンペティションの賞品が自転車だったのである。

1898年11月に告知された“Grand Prize”では、“Two Splendid Prizes of the Celebrated Lady’s ‘Swift’ Bicycles Are Offered to Readers of ‘The Girl’s Realm’” (89) と題して、以下の課題の優勝者に商品を贈呈した。フランス語の物語を一番上手に英語に翻訳した読者には、30ポンド相当の女性用“Swift”自転車が、存命中の少女小説家のうち最も人気のある6人を人気順に並べて、最も正確なリストを作った読者には、20ポンド相当の女性用“Swift”自転車が、そして17歳以下の読者で、最も素晴らしいオリジナルの絵を書いた読者には16ポンド相当のマシンが贈られた(89)。コンペティションに参加するには広告欄のコンペティション用クーポンを添付しなければならないので、必ず雑誌を買わなければならなかった。

また図7にあるように、1901年11月の“Grand Prize Competition”でも再び自転車が優勝賞品となった。

このコンペティションの内容は、“representative as far as may be, of feminism devotion, heroism, talent, and leadership” (xiii) という「モダン」な視点から選ばれた14人の著名な女



図7 自転車が賞品のコンペティション (p. xii)



性の中から“most loved and admired by girls” (xiii) である人物に投票するというものだった。参加するにはもちろんクーポンが必要なのだが、そこに必要事項を書いて送ると、希望者には新しいクーポンが25枚返送されるため、自分が第1位に選ばれるよう友人や姉妹に協力してもらうこともできた。もっとクーポンが欲しい読者は、もう1冊雑誌を買えばさらに手に入った。さながらねずみ講のような手法でGRは発行部数を伸ばし、新規読者を獲得しようとしたのである。まさに消費を良しとする社会を反映した雑誌だと言える。

このコンペティションの賞品は、2位はイヴニング・ドレス、3位は帽子、4位と5位はシルクのブラウスといったように、「少女」向けのモノの中であって、自転車が優勝賞品であるのは、いかに自転車が少女文化に十分に浸透していたか、そして少女がもつ欲求の対象であったかを表している。ちなみに優勝者は、3,242票をJoan of Arcに投票したA. Mary Fieldという読者だった(“Our Voting Competition” 447)。1冊6ペンスの雑誌につき25枚クーポンがもらえるととして、3,242票を集めるには130冊程度、つまり8ポンド近く支払うことになる。その見返りが22ポンド相当の自転車なのだから、優勝者はそもそも自転車を買う程度の財力があつたのではないだろうか。つまりこの読者には、自転車が欲しいという欲求があるのと同時に、彼女が競争で自転車を勝ち取るための付加価値を求めているのは明らかなのである。編集者によると、このコンペティションは合計30万票を集めた。それだけこうした競争に参加したい少女が多かつたということである。自転車はその実体がなくとも少女の消費欲求を増幅させることができる装置として機能していたのだ。しかしそれは裏を返せば、少女が完全に大衆消費社会に巻き込まれ、19世紀半ばには存在していた、消費に拠らない価値体系から断絶されたということになる。自転車の罪とはここにある。

自転車は小説やエッセイにおいて、少年に負けない少女を描くために使われるだけでなく、実在の少女である読者が競争心と消費欲求を持つ存在であることを曝け出す機能があつた。「モダン」な少女を描くGRにおいて、自転車は消費を基盤とした社会に染まつた少女の姿を露わに映し出す装置だつたのだとすることができるだろう。

## 終わりに

19世紀半ば、「少女」は極めてモビリティが制限された存在だつた。それは物理的にも精神的にも、「少女」という領域の中に閉じ込められていたからである。“The Girl of the Period” という言葉は、当時流行を追う少女を揶揄するものだったが、1880年代から90年代に入ると、“The Girl of the Period”こそが、少女たちが憧れるような存在になつた。少女はただ自転車に乗り、昔よりも自由に物理的に遠くへ行けるようになっただけでなく、技術と管理責任を学び、自転車を自分の身体のように



扱って、辛抱強さと我慢を習得し、自立の精神を習得した。20世紀に入るころには、自転車は少女の能力の高さを証明するものになり、少女は少年と同じ土俵に立てるということ、そして少年に負けない努力ができるのだということが示された。さらに、自転車は少女から強烈な競争心と、消費欲求、そして消費そのものを誘い出した。「モダン」な時代の訪れを告げる自転車の大流行は、「少女」という存在を巡る言説にも少なからず影響を与え、少女をさらなる解放へと導いたと言えるのではないだろうか。

なお本稿は、2019年度日本児童文学学会5月例会（於日本フラワーデザイン専門学校）における口頭発表の内容に加筆・修正を加えたものである。またJSPS科研費 19K13111（イギリス少女雑誌における「新しい少女」と「新しい読者」の形成）の助成を受けている。

#### 《注》

1. *Girl's Own Paper* というタイトルは1880年から1908年10月まで使用された。1908年11月から1927年までは *Girl's Own Paper and Woman's Magazine*, 1928年から1930年までは *Woman's Magazine and Girl's Own Paper*, 1931年から1947年までは再度 *Girl's Own Paper*, 1947年から1950年まで *Girl's Own Paper and Heiress*, 1951年から1956年の廃刊まで *Heiress* というタイトルが使われた。なお本稿では1年分が1冊にまとめて販売されていた年版から全て引用する。
2. タイトルは1866年に *Monthly Packet of Evening Readings for Members of the English Church* に変更された。

#### 《引用文献》

- Ambrose, Tom. *The History of Cycling in Fifty Bikes*. Quid Publishing, 2013. 『50の名車とアイテムで知る自転車の歴史』甲斐理恵子訳, 原書房, 2014年。
- Blaquière, Dora de. "The Dress for Bicycling." *Girl's Own Paper*, vol. 17, no. 823, 5 Oct. 1895, pp. 12-14.
- Bacon, N. G. "The Newest Bicycles." *Girl's Own Paper*, vol. 24, no. 1223, 6 June 1903, pp. 565-67.
- Cook, Daniel Thomas. "Children's Consumption in History." *The Oxford Handbook of the History of Consumption*. Oxford UP, 2012. pp. 583-600.
- Cowham, Hilda. "How to Keep My Machine Nice." *Girl's Realm*, vol. 4, no. 43. 1902, pp. 576-78.
- "The Cycle: How to Keep and Clean It." *Girl's Own Paper*, vol. 18, no. 897, 6 March 1897, pp. 362-64.
- Dickinson, Robert L. "Abstracts from Foreign Journals." *Practitioner*, vol. 54,

- March 1895, p. 280.
- Drotner, Kirsten. *English Children and Their Magazines, 1751-1945*. Yale UP, 1988.
- Forrester, Wendy. *Great-Grandmother's Weekly: A Celebration of the Girl's Own Paper, 1880-1901*. Lutterworth Press, 1980.
- Foucault, Michel. *The History of Sexuality*, vol.1, translated by Robert Hurley. Pantheon Books, 1978. 『性の歴史I 知への意志』 渡辺守章訳。新潮社, 1986年。
- “Grand Prize.” *Girl's Realm*, vol. 1, no. 1, Nov. 1898, p. 89.
- “Grand Prize Competition.” *Girl's Realm*, vol. 4, no. 37, Nov. 1901, pp. xii-xiii.
- The Lady Dressmaker. “Girls' Attire: The Newest and Best.” *Girl's Own Paper*, vol. 17, no. 844, 29 Feb. 1896, pp. 344-46.
- Linton, Eliza Lynn. *The Girl of the Period and Other Social Essays*. Richard Bentley & Son, 1888.
- Liston, Lawrence. “Bicycling to Health and Fortune.” *Girl's Own Paper*, vol. 19, no. 930, 23 Oct. 1897, pp. 52-53.
- . “Bicycle Worries and How to Cope with Them-Part1.” *Girl's Own Paper*, vol. 22, no. 1100, 26 Jan. 1901, pp. 258-60.
- . “Bicycle Worries and How to Cope with Them-Part2.” *Girl's Own Paper*, vol. 22, no. 1108, 23 Mar. 1901, pp. 388-90.
- Macquoid, Katherine S. “A Puncture.” *Girl's Realm*, vol. 2, no. 22, Aug. 1900, pp. 979-985.
- Marland, Hilary. *Heath and Girlhood in Britain, 1874-1920*. Palgrave Macmillan, 2013.
- Mitchell, Sally. *The New Girl: Girls' Culture in England, 1880-1915*. Columbia UP, 1995.
- Moruzi, Kristine. *Constructing Girlhood through the Periodical Press, 1850-1915*. Routledge, 2012.
- . “Children's Periodicals.” *The Routledge Handbook to Nineteenth-Century British Periodicals and Newspapers*. Routledge, 2016, pp. 293-306.
- Onslow, Barbara. *Women of the Press in Nineteenth-Century Britain*. Macmillan, 2000.
- “Our Voting Competition.” *Girl's Realm*, vol. 4, no. 40, Feb. 1902, pp. 446-49.
- Rubinstein, David. “Cycling in the 1890s.” *Victorian Studies*, vol. 21, no. 1, 1977, pp. 47-71. *JSTOR*, [www.jstor.org/stable/3825934](http://www.jstor.org/stable/3825934).
- Shofield, A. T. “The Cycling Craze.” *Girl's Own Paper*, vol. 17, no. 834, 21 Dec. 1895, pp. 185-86.
- Turner, Ethel. “Little Mother Meg.” *Girl's Realm*, vol. 5, no. 50, Dec. 1902, pp. 111-21.
- “What Girls Are Doing.” *Girl's Realm*, vol. 4, no. 37, Nov. 1901, pp. 76-77.
- Willard, Frances. *A Wheel within a Wheel*. Hutchinson, 1895.

- Willis, Chris. “Heaven defend me from political or highly-educated woman!': Packaging the New Woman for Mass Consumption.” *The New Woman in Fiction and Fact*. Edited by Angelique Richardson and Chris Willis, Palgrave Macmillan, 2001.
- Wintle, Sarah. “Horses, Bikes and Automobiles: New Woman on the Move.” *The New Woman in Fiction and Fact*. Edited by Angelique Richardson and Chris Willis, Palgrave Macmillan, 2001.
- Wright, John. D. *The Victorians: From Empire and Industry to Poverty and Famine*. Amber Books, 2018. 『ヴィクトリア朝時代 — 19世紀ロンドンの世相・暮らし・人々』角敦子訳, 原書房, 2019年。
- Yonge, Charlotte Mary. “Introductory Letter.” *Monthly Packet of Evening Readings for Younger Members of the English Church: First Series*, vol. 1, 1851. pp, i-iv.
- 川端有子『ヴィクトリア朝の女性と暮らし — ワーキング・クラスの人々』河出書房新社, 2019年。
- 武田美保子『<新しい女>の系譜 — ジェンダーの言説とイメージ』彩流社, 2003年。
- 永井聖二「消費社会と子どもの文化」『消費社会と子どもの文化』永井聖二・加藤理編, 学文社, 2010年。
- 山村明子『ヴィクトリア朝の女性たち — ファッションとレジャーの歴史』原書房, 2019年。